調査報告
胡環/アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル 8(2016) 37-44

中国語を母語とする初級日本語学習者における日本語漢字語彙の学習ストラテジーに関する調査

胡環

要旨

本研究は、中国語を母語とする初級の日本語学習者を対象とし、学習者が日本語の漢字語彙についてどのような問題意識をもっているかを、アンケート調査を用いて検討した。その結果、中国語と日本語で形態が類似する単語は習得しやすく、音韻が類似する単語は習得しにくいことが示された。初級の日本語学習者は日本語の漢字語彙を学習する際、無意識に単語の中国語と日本語の形態情報に頼ることが明らかになった。一方、学習者ができるだけ母語である中国語の影響を避けようとしているにもかかわらず、誤用が生じてしまう傾向がみられた。以上の結果より、日本語学習の初期段階から、漢字語彙の日本語と中国語の形態や音韻上の相違を学習者にしっかりと認識させることの重要性を提案したい。

キーワード

中国人初級学習者、日本語漢字語彙、学習ストラテジー、学習意識、誤用

1. はじめに

中国語を母語（native language; first language とほぼ同義として以下、L1）とする初級日本語学習者は日本語の漢字単語について、どのように学習して覚えているのだろうか。中国語と日本語（以下、中日）には、漢字という共通の表記形態が使用されているため、中国語 L1 話者は、他の言語を L1 とする日本語学習者よりも、日本語の漢字語彙の学習において有利であると思われやすい。しかし、中日 2 言語間で漢字の形態・音韻・意味が類似する部分があるため、学習者が日本語の漢字語彙の学習に深い注意が行かず、誤った解釈に至る、すなわち誤用が生じてしまう場合も少なくない。

向井（2013）は、中国語を L1 とする日本語学習者を対象に、彼らに対する日本語漢字字形指導のための実態調査を行った。その結果、学習者が L1 である中国語の簡体字で日本語の漢字を書いてしまうことが観察され、多くの日本語教師は日本語漢字の字形指導の必要性を感じていることが報告された。また、胡（2012）は、中国語を L1 とする日本語学習者を対象に、漢字の音読みの習得に及ぼす L1 である中国語の影響を調べた。その結果、学習者は中国語の同音漢字において、中国語の発音が同じであれば、日本語の音読みも同じだろうと考える傾向があり、誤用が生じてしまうことが指摘された。また、李（2006）は、中国語を L1 とする日本語学習者を対象に、中日 2 言語間の同形同義語と同形異義語の意味習得の状況を検討した。その結果、中国語の意味範囲のほうが広い同形語と日本語の意味範囲のほうが広い同形語は、誤用されやすく、上級の学習者においても誤用が依然存在することが示唆された。これらの研究から、中国語を L1 とする日本語学習者は、日本語漢字単語の形態・音韻・意味の習得のいずれにおいても、L1 である中国語から影響を受けることがうかがえる。

また近年、中国語を L1 とする日本語学習者における日本語漢字単語の処理過程[1]において、L1 である中国語の漢字知識が影響を及ぼすことが明らかとなった（松見・費・蔡 2012、2014)。これらの研究は、中級・上級の学習者を対象としており、学習者の中で既に構築されている心内辞書（mental lexicon）[2]を検討している。日本語漢字単語の形態・音韻・意味情報の処理において、L1 である中国語からの負の影響を受ける場合もあることが報告されている。日本語の習熟度が高い上級の学習者においても、学習者が既習の日本語の漢字語彙を理解する際、L1 からの影響を受けることが示唆された。

以上をまとめると、中国語を L1 とする日本語学習者は、日本語漢字単語の習得段階においても、運用段階においても、L1 である中国語から影響を受けることが明らかとなっている。では、心内辞書がまだ完全に構築されていない初級の学習段階では、学習者は日本語漢字単語について、どのような問題意識をもっているのだろうか。本研究では、この問題を扱う。

2. 本研究の目的

本研究では、中国語を L1 とする初級の日本語学習者を対象に、学習者が日本語漢字単語の学習について、どのような問題意識をもっているのかを検討することを目的とする。具体的には、以下の 2 点を明らかにする。

(1) 先行研究をふまえて予備調査を行い、学習者における日本語漢字単語の学習ストラテジーを提示する。

(2) 学習者の日本語漢字単語の学習ストラテジーをもとに、意識調査を行い、初級学習者がもっている日本語漢字語彙の学習意識を検討する。

本研究の検討によって、中級・上級学習者を対象とした漢字単語の処理過程の解釈に示唆が得られるであろう。そして、学習者の日本語漢字語彙の学習過程への推測が可能となり、より効果的な漢字語彙学習法の考案につながるだろう。

3. 調査概要

3.1 学習ストラテジーに関する調査

3.1.1 参加者

調査の参加者は中国語を L1 とする日本語学習者 118 名であった。全員が、中国国内の大学で日本語を主専攻とする大学 2、3、4 年生であった。本調査の参加時、全員が日本に滞在した経験がなかった。

3.1.2 手続き

調査参加者に、「日本語の漢字単語についてどのように思っているのでしょうか。」、「普段、日本語の漢字単語をどのように勉強しているのでしょうか。」の 2 つの質問が書かれている調査用紙が配付された。この 2 つの質問について、自由記述をしてもらった。

3.1.3 結果の分析

調査協力者の回答を分析した結果、以下の 18 項目が選定された（表 1 を参照)。18 項目のうち、漢字の形態に関するものは 4 項目であり（項目 1、2、3、4)、漢字の音韻に関するものは、7 項目であった（項目 5、6、7、8、9、10、11)。また、漢字の形態・音韻・

意味のうちの複数にまたがるものは 7 項目であった（項目 12、13、14、15、16、17、18)。形態のみや音韻のみの項目とは異なり、このグループではすべての項目が意味情報と関わっており、形態または音韻情報と組み合わせるものがほとんどであった。

表 1　日本語漢字単語の学習ストラテジー

1	漢字単語の形態を覚えることが難しい。	10	聞いてわからない単語を中国語音との類似性によって意味を推測する。
2	中国語の漢字の形態情報を利用して日本語の漢字単語を勉強する。	11	読解のように文章を黙読するとき、心の中で漢字を中国語で読んで理解することが多い。
3	知らない漢字単語があったら、中国語の形態で意味を推測する。	12	私にとって、日本語の仮名よりも漢字の学習の方が難しい。
4	同一単語は、形態を見る時より聞く時の方が難しい。	13	漢字単語の意味を覚えることが難しい。
5	漢字単語の発音を覚えることが難しい。	14	形態が類似する単語に対し、形態を見たら意味がわかるので、日本語の発音を無視することが多い。
6	中国語の漢字の発音（ピンイン）を利用して日本語の漢字を勉強する。	15	中国語に頼らずに、できるだけ日本語として漢字を覚える。
7	漢字単語の中国語と日本語の発音が似ているか似ていないかにしばしば気づくと思う。	16	「残念」のようなそのままの形が中国語に存在しない漢字単語でも、中国語で読んで覚える。
8	日本語の漢字単語を中国語で黙読もしくは音読して覚えることが多い。	17	形態が類似しない単語より類似する単語の意味が覚えやすい。
9	音韻が類似しない単語より類似する単語の方が覚えやすい。	18	見てわかる単語でも聞いてすぐに理解できないことが多い。

3.2　学習意識に関する調査

3.2.1　参加者

本調査の参加者は、調査 1 に参加しなかった中国語を L1 とする初級の日本語学習者 66 名であった。全員が、中国国内の大学で日本語を主専攻とする大学 1 年生であり、日本語学習歴は半年であった。

3.2.2　手続き

学習ストラテジーに関する調査で得られた 18 個の質問項目を取り上げ、6 件法を用いて意識調査を行った。調査協力者に、日本語の漢字単語を学習している時の自分を振り返りながら、次の質問項目について、あてはまる数字の 1 つに〇をつけるように指示した（「1」全くそうでない～「6」全くそうである)。

3.2.3　結果の分析

各質問項目の平均評定値及び標準偏差を表 2 に示す。形態に関する 4 項目のうち、3 項目の平均評定値が高いことが分かった。学習者が L1 の形態情報を利用して日本語の漢字単語を学習する傾向がうかがえる。また、音韻に関する項目のうち、平均評定値が比較的

低い項目が多いことが示された。学習者には、日本語の漢字単語を学習する際、できるだけ L1 の音韻情報を使用しないように注意する傾向があることが分かった。さらに、形態・音韻・意味のうちの複数にまたがる項目では、漢字単語の形態情報または音韻情報が意味との連結の強弱という点において、形態のみまたは音韻のみに関する項目の結果と同様の傾向がみられた。すなわち、中国人初級学習者にとって、形態情報に頼る習得は容易と認識されやすく、形態情報と意味情報との連結が強いのに対して、音韻情報を通した単語の習得は困難と認識されやすく、音韻情報と意味情報との連結が弱いことが示唆された。

表 2　各質問項目の平均評定値及び標準偏差

質問項目	*M*	*SD*	質問項目	*M*	*SD*	質問項目	*M*	*SD*
1	3.26	1.40	7	3.92	1.44	13	3.11	1.33
2	4.14	1.39	8	2.89	1.59	14	3.23	1.47
3	4.73	0.81	9	4.39	1.30	15	3.70	1.32
4	4.29	1.40	10	4.00	1.36	16	3.17	1.77
5	4.18	1.35	11	4.23	1.21	17	4.97	1.14
6	3.03	1.55	12	3.03	1.40	18	4.85	1.01

4.　考察

本研究では、中国語を L1 とする初級の日本語学習者を対象に、学習者が日本語の漢字単語の学習にどのような問題意識をもっているのかを調べた。以下、各質問項目において、6 段階評定の各段階の選択率をもとに考察を行う。

まず、形態情報に関する各質問項目について考察する。表 3 に、4 質問項目における、6 段階の各段階の選択率を示す。項目 1 の「漢字単語の形態を覚えることが難しい」については、全くそうであると答えた学生は 4%しかいなかった。L1 に漢字しかない中国人日本語学習者は、日本語漢字単語の形態の習得が簡単であるという意識をもっていることが示された。また、項目 2 と項目 3 における、6 段階の各段階の選択率を見ると、「5：そうである」と「6：全くそうである」の選択率が高いことが分かった。多くの学習者は、L1 である中国語の形態情報を利用して日本語漢字単語の形態を学習するという意識をもっていることがうかがえる。そして、項目 4 の「同一単語は、形態を見る時より聞く時の方が難しい」という結果は興味深い。「5：そうである」と「6：全くそうである」の選択率が 78%であり、非常に高いことが分かった。学習者が L1 の形態情報に頼ってしまう結果、日本語の音韻情報の習得が遅れてしまうことが推察できる。項目 4 の結果は、項目 1、2、3 の結果と一致するものであった。

表 3　形態に関する各質問項目の各段階の選択率

質問項目		*1*	*2*	*3*	*4*	*5*	*6*
1	漢字単語の形態を覚えることが難しい。	11%	23%	24%	20%	18%	4%
2	中国語の漢字の形態情報を利用して日本語の漢字単語を勉強する。	5%	11%	15%	20%	34%	15%
3	知らない漢字単語があったら、中国語の形態で意味を推測する。	0%	2%	3%	32%	48%	15%
4	同一単語は、形態を見る時より聞く時の方が難しい。	3%	2%	5%	12%	44%	34%

次に、音韻情報に関する各質問項目について考察する。表 4 に、7 質問項目において、6 段階の各段階の選択率を示す。項目 5 の「漢字単語の発音を覚えるのが難しい」については、「5：そうである」と「6：全くそうである」の選択率が 52%であった。日本語漢字単語の音韻習得について、苦手意識をもっている学習者が多いことが分かった。また、項目 9 の「音韻が類似しない単語より類似する単語の方が覚えやすい」については、「5：そうである」と「6：全くそうである」の選択率が 64%であった。この結果から、学習者が L1 である中国語の音韻情報を利用して日本語漢字の音韻を学習するという意識をもっていることが推察できる。この結果と一致するものとして項目 10 も挙げられる。項目 10 の「聞いてわからない単語を中国語音との類似性によって意味を推測する」については、「5：そうである」と「6：全くそうである」の選択率が 45%であった。音韻学習時だけでなく、音韻を処理するときも、学習者は L1 である中国語の音韻情報を利用していることが示唆された。学習者は L1 である中国語の音韻情報を積極的に利用している（項目 9、10）にもかかわらず、日本語漢字単語の音韻習得に苦手意識（項目 5）をもっている。この点から、L1 の音韻情報を利用することは、必ずしも成功に至るとは限らないと考えられる。すなわち、L1 の音韻情報を利用することによって、日本語漢字の音韻習得に負の影響をもたらす可能性があることが示唆された。

表 4　音韻に関する各質問項目の各段階の選択率

質問項目		*1*	*2*	*3*	*4*	*5*	*6*
5	漢字単語の発音を覚えることが難しい。	3%	14%	6%	25%	41%	11%
6	中国語の漢字の発音（ピンイン）を利用して日本語の漢字を勉強する。	25%	15%	11%	26%	21%	2%
7	漢字単語の中国語と日本語の発音が似ているか似ていないかにしばしば気づくと思う。	6%	15%	11%	26%	30%	12%
8	日本語の漢字単語を中国語で黙読もしくは音読して覚えることが多い。	21%	30%	12%	21%	5%	11%
9	音韻が類似しない単語より類似する単語の方が覚えやすい。	2%	8%	11%	15%	49%	15%
10	聞いてわからない単語を中国語音との類似性によって意味を推測する。	5%	14%	9%	27%	36%	9%
11	読解のように文章を黙読するとき、心の中で漢字を中国語で読んで理解することが多い。	3%	11%	8%	24%	48%	6%

一方、項目 6 の「中国語の漢字の発音（ピンイン）を利用して日本語の漢字を勉強する」については、「5：そうである」と「6：全くそうである」の選択率が 23%であった。項目 8 の「日本語の漢字単語を中国語で読んで覚えることが多い」については、「5：そうである」と「6：全くそうである」の選択率が 16%であった。この 2 つの項目における 6 段階評定の各段階の選択率が低いことが分かった。学習者が日本語の漢字単語を学習するとき、意識的に L1 の音韻情報を利用しないように注意を払っていると推察できる。しかし、前述の項目 9、10 の結果から、学習者が無意識に L1 の音韻情報に頼っていることが

分かった。この 2 つの結果の違いは興味深い。学習者が日本語漢字の学習において、意識的に L1 の音韻情報の影響を避けようとしても、無意識に L1 の音韻情報に頼っていることがうかがえる。

最後に、形態・音韻・意味のうちの複数にまたがる各質問項目について考察する。表 5 に、7 質問項目において、6 段階の各段階の選択率を示す。項目 13 の「漢字単語の意味を覚えることが難しい」については、「5：そうである」と「6：全くそうである」の選択率が 13%であった。L1 である中国語の漢字知識があるため、日本語の漢字単語の意味学習が簡単であるという意識をもっている学習者が非常に多いことが分かった。しかし一方、李（2006）では、中国人学習者にとって、誤用されやすい中日同形語が多く存在することが報告されている。特に中日同形異義語において、学習者には、L1 である中国語の意味で日本語漢字単語の意味を学習する傾向にあることがうかがえる。学習者は、中国語の意味が日本語にも存在すると思い込んでしまい、誤用が生じてしまうことが考えられる。この結果は項目 17 の結果と一致するものであった。項目 17 の「形態が類似しない単語より類似する単語の意味が覚えやすい」については、「5：そうである」と「6：全くそうである」の選択率が 57%であった。形態同形単語の意味習得が簡単であるという意識をもっている学習者が多いことが分かった。中国語 L1 話者にとって、日本語漢字単語の意味習得に L1 である中国語の意味情報からの影響を避けることが難しいと考えられる。

表 5　形態・音韻・意味の複数にまたがる各質問項目の各段階の選択率

質問項目		*1*	*2*	*3*	*4*	*5*	*6*
12	私にとって、日本語の仮名よりも漢字の学習の方が難しい。	15%	29%	14%	22%	17%	3%
13	漢字単語の意味を覚えることが難しい。	12%	24%	21%	30%	8%	5%
14	形態が類似する単語に対し、形態を見たら意味がわかるので、日本語の発音を無視することが多い。	12%	27%	14%	26%	15%	6%
15	中国語に頼らずに、できるだけ日本語として漢字を覚える。	2%	23%	23%	17%	29%	6%
16	「残念」のようなそのままの形が中国語に存在しない漢字単語でも、中国語で読んで覚える。	27%	17%	6%	23%	18%	9%
17	形態が類似しない単語より類似する単語の意味が覚えやすい。	5%	11%	6%	21%	39%	18%
18	見てわかる単語でも聞いてすぐに理解できないことが多い。	2%	2%	4%	26%	45%	21%

では、中日 2 言語間の非同形語について、学習者がどのような問題意識をもっているのだろうか。項目 16 の「『残念』のようなそのままの形が中国語に存在しない漢字単語でも、中国語で読んで覚える」については、「5：そうである」と「6：全くそうである」の選択率が 27%であった。「4：ある程度そうである」の選択率（23%）と合わせて、50%の学習者に非同形語をそのまま中国語で読んで学習する傾向があることがうかがえる。「残念」は、そのままの形が中国語には存在しない（非単語である）。しかし、「残念」と

いう日本語単語の構成漢字である「残」と「念」は中国語に存在するため、学習者が便宜的に「残念」を「can nian」で読んでしまうことが予想される。松見他（2012）では、学習者が「残念」のような非同形語を理解する際、L1 の読みである「can nian」からの影響を受けることが指摘されている。学習年数が多くなるにつれ、非単語である「can nian」のような中国語の音韻が学習者の心内辞書で定着してしまうと考えられる。この学習ストラテジーは、誤用になる原因の一つと言えよう。

また、項目 18 についても興味深い結果が得られた。項目 18 の「見てわかる単語でも聞いてすぐに理解できないことが多い」については、「4：ある程度そうである」、「5：そうである」、「6：全くそうである」の選択率が合わせて 92%となっている。同一単語に対して、形態情報を見て理解するときよりも音韻情報を聞いて理解するときのほうが理解が難しいことが明らかとなった。このような現象の原因として、前述の L1 の形態・音韻情報に頼ることや、音韻情報の習得が L1 から負の影響があることなどが挙げられる。中国語を L1 とする日本語学習者は日本語の聴解が苦手であることがよく指摘されている（尹 2001）。この現象は日本語学習者の初級段階における学習ストラテジーと深くかかわっていることが推察できよう。

本研究の調査結果をまとめると、中国語を L1 とする初級の学習者がもっている日本語漢字単語の学習意識について、以下のようなことが言えよう。

（1）形態・音韻・意味情報が類似する単語のほうが覚えやすい。
（2）単語の音韻・意味情報よりも形態情報のほうが学習しやすい。
（3）学習者は意識的に L1 である中国語の形態・音韻情報の影響を避けようとしている。
（4）学習者は無意識に L1 である中国語の形態・音韻・意味情報に頼っている。
（5）視覚呈示される単語よりも聴覚呈示される単語のほうが理解しにくい。

5. 終わりに

中国国内の日本語学習者は、日本国内の学習者と比べて普段日本語と接触する機会が少なく、L1 である中国語をメインにしてコミュニケーションをとっていることが考えられる。そのため、日本語の漢字単語の学習において L1 から影響を受けることが予測される。本研究の調査結果は、この推測を支持するものであった。

中国語を L1 とする日本語学習者は、日本語学習の初期段階から、L1 である中国語から影響を受けることが明らかとなった。その影響は、中級や上級になっても消えることがなく、継続していることが分かった。また、本研究の調査結果は、単語の処理過程の研究結果と一致するものであった（蔡・松見 2009、松見他 2012）。

初級の学習者が日本語の漢字単語を学習する際、できるだけ L1 からの影響を避けようとしているにもかかわらず、無意識に L1 の漢字単語の形態・音韻・意味情報に頼ってしまう。このギャップは学習者の自主学習や教師の指導において、重視されるべきであろう。学習者は、日本語学習時に、中日漢字の形態・音韻・意味情報の違いに十分注意を払う必要があると考えられる。教師は、教案作成や教室指導において、効果的な指導法を工夫する必要があろう。また、視覚呈示される単語よりも聴覚呈示される単語のほうの理解が難しいことから、聴覚呈示による練習を増やしたり、視覚・聴覚呈示が融合した学習方法を考えたりすることも必要であろう。

本研究では、初級の日本語学習者における日本語漢字単語の学習ストラテジーを調査し、学習者の日本語漢字単語の学習時における問題意識を調べ、それらの結果を報告した。本研究の報告結果より、日本語教育の現場に一定の教育的示唆を導出することができたことから、本研究は一定の意義があると言えよう。

今後、更なる調査を重ね、学習者の学習ストラテジーを提示する必要があると考えられる。さらに、因子分析など異なる分析方法を用いて、学習者がもっている問題意識を明らかにする必要もあろう。これら 2 点を今後の課題として提示したい。

（胡環こかん・青島科技大学・huh_72@yahoo.co.jp）

注

1. 単語の処理過程とは、目で見た単語の形態情報、または耳で聞いた単語の音韻情報から、その単語の概念表象にアクセスして、その単語の意味を理解する過程のことである。第二言語学習者の場合は、呈示された単語の形態情報または音韻情報から概念表象に意味アクセスする際、学習者がもつ 2 つの言語の形態・音韻情報がかかわる。
2. 認知心理学では、人間の脳あるいは心の中にある形態・音韻・意味情報や統語に関する単語の集合体を心内辞書と呼ぶ。これらの情報が相互につながっており、ネットワークの構造になっているとされている。第二言語の心内辞書は、その言語の習得にともなって構築されていく。学習者の習熟度が上がるにつれ、心内辞書が変容するとされている。

参考文献

尹松（2001）「聴解ストラテジー使用と聴解力との関係について：日本語を主専攻とする中国人大学生の意識調査の結果から」『言語文化と日本語教育』7，58-70.

胡暁睿（2012）「漢字の音読みの習得に及ぼす母語の影響―中国人日本語学習者の場合―」『明海日本語』17，93-102.

蔡鳳香・松見法男（2009）「中国語を母語とする上級日本語学習者における日本語漢字単語の処理過程―同根語と非同根語を用いた言語間プライミング法による検討―」『日本語教育』141，14-24.

松見法男・費暁東・蔡鳳香（2012）「第 1 部論文 2　日本語漢字単語の処理過程―中国語を母語とする中級日本語学習者を対象とした実験的検討―」畑佐一味・畑佐由紀子・百濟正和・清水崇文(編著)『第二言語習得研究と言語教育』くろしお出版，43-67.

松見法男・費暁東・蔡鳳香（2014）「中国語を母語とする日本語学習者における中国語の単語処理に及ぼす日本語の影響―中日 2 言語間の形態・音韻類似性を操作した実験的検討―」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部（文化教育開発関連領域）』63，191-198.

向井留実子（2013）「中国人日本語学習者に対する漢字字形指導のための実態調査―学習者の理解度と漢字の使用実態に即したシラバス構築を目指して―」『漢字・日本語教育研究』3，138-195.

李愛華（2006）「中国人日本語学習者による漢語の意味習得―日中同形語を対象に―」『筑波大学　地域研究』26，185-203.